

聴覚障害特別支援学校の生徒における規範意識に関する調査研究

金子 智樹

I 問題

規範意識の低下は、規則やマナーを守らない子どもの増加を招いている。平成 19 年の学校教育法では、第 21 条において、規範意識を育むことなどが義務教育の目標として新たに規定された。特別支援教育においても、主体的に社会の形成に参画するため、生徒が自他の生命を尊重し、自分の将来を考え、法やきまりの意義の理解を深める配慮が必要(文部科学省, 2009)と述べられている。

聴覚障害生徒は、学力や言語習得上の問題、コミュニケーション上の制約により社会的規範や道徳理解に困難があり(中野・根本, 2006)、社会規範や道徳規範の発達に課題があるものがある(中野・斉藤, 1996)。そこで、聴覚障害生徒の規範意識を育成するために、規範意識の現状を把握し、規範意識を高めるための要因を検討することは意義のあることだと考える。

II 目的

聴覚特別支援学校に在籍する中学部・高等部生徒の規範意識の特徴を明らかにし、聴覚特別支援学校生徒の規範意識を高めるための要因や行動について検討する。

III 方法

1 調査対象

全国の聴覚特別支援学校から地域に偏りが出ないように考慮して 30 校を抽出し、中学部・高等部に在籍する生徒を対象とした。

2 調査方法

郵送法による質問紙調査を実施した。

3 調査期間

2012 年 10 月～11 月

4 調査項目

総務庁青少年対策本部(1988, 1993)、高野(1989)、栃木県総合教育センター(2011)を参考にしてフェイスシート及び質問項目を作成した。

質問項目は、以下の通りである。

1)きまりやマナーの知識(13 項目)

規範意識に関係するきまりやマナーについての知識を「知っている」「知らない」の 2 件法で尋ねた。

2)きまりやマナーに関する経験(14 項目)

規範意識に関係する生徒の経験について知るため「よくある」「ときどきある」「あまりない」「まったくない」の 4 件法で尋ねた。

3)慣習的価値への態度(12 項目)

規範意識に関係する生活信条、一般道徳について「とても大切」「大切」「少し大切」「大切でない」の 4 件法で尋ねた。

4)言い訳条件付加での規範意識(12 項目)

「言い訳条件」が付いた場合に規範意識の低い行動に対して、どの程度悪いと思うのかを「悪くない」「あまり悪くない」「少し悪い」「悪い」の 4 件法で尋ねた。

なお、ここでいう「言い訳条件」とは、規範意識の低い行動に対して悪さの意識を軽減させるような状況要因のことである。

5)規範意識の内面化について (12 項目)

規範意識の低い行動に対して、悪いと判断する理由を尋ねることにより、何によって規範が内面化されているかを調べる項目である。

IV 結果及び考察

1 回収率

質問紙を送付した聴覚特別支援学校 30 校(1038 名)のうち、回答のあった学校数は 17 校(56.7%)、生徒数は 555 名(53.5%)であり、うち有効回答数は、536 名(51.6%)であった。

2 きまりやマナーの知識

きまりやマナーの知識は、「知っている」と回答した割合が多く、「知っている」の割合が 95%を超えた項目が 13 項目中 10 項目あった。聴覚障害

生徒は、きまりやマナーについての知識をしっかり身につけていることが示唆された。

3 きまりやマナーに関する経験

聴覚障害生徒は、「家族に挨拶をする」の項目で、「よくある」「ときどきある」の合計が、中2が80.0%、高2が80.9%であった。長崎県教育センター(2008)が一般生徒に実施した先行研究では、中2が70.1%、高2が68.3%という結果であった。聴覚障害生徒は、一般生徒よりも家庭で挨拶を良くしており、学年に関わらず挨拶する割合が高い傾向が得られた。

また、「意見が合わないときでも家族が意見を聞いてくれる」の項目では、「よくある」「ときどきある」の合計が、中2が63.5%、高2が62.6%であった。栃木県総合教育センター(2011)が一般生徒に実施した先行研究では、中2が78.9%、高2が74.1%であり、聴覚障害生徒の方が低い数値となった。

4 慣習的価値への態度

規範意識の低さを反映する「非行を許容する文化の項目」(「人にいいところを見せる」「指示を受けない」「将来より今を楽しくやる」の3項目)について、「とても大切」「大切」と回答した割合は、「人にいいところを見せる」52.7%、「指示を受けない」38.4%、「将来よりも今を楽しくやる」64.9%であった。一方、総務庁青少年対策本部(1988)が一般生徒に実施した先行研究では、「人にいいところを見せる」17.8%、「指示を受けない」25.1%、「将来よりも今を楽しくやる」41.5%であり、一般生徒よりも聴覚障害生徒のほうが「とても大切」「大切」と回答している割合が高かった。一方でこの項目以外では、聴覚障害生徒の方が一般生徒よりも規範意識が高い傾向が見られた。

また、一般生徒は学年の上昇に伴って規範意識が低下する傾向がある(廣岡・横矢, 2006)と述べられているが、聴覚障害生徒ではそのような傾向が見られなかった。滝(2006)は、異学年交流によって上級生に自覚や責任感が育まれると述べている。特別支援学校は、異なる学部が併置されているため、異学年交流が容易であることや、学部が

変わっても学校が変わらないので、環境の変化が少ないことが影響しているのではないかと考える。

5 言い訳条件付加での規範意識

このカテゴリーには、「迷惑をかけていないから夜遅くまで遊ぶ」「先に叩かれたので叩く」等の合理化された言い訳条件に当たる質問項目が4項目含まれていた。合理化された言い訳とは、侵害の否定や相手への非難等を言い訳にする場合で、「誰にも迷惑がかからないので」「みんながいけないので」というような内容である。

物事を一面的ではなく多面的に見て柔軟に判断できることは、社会的成熟度が高く望ましい(総務庁青少年対策本部, 1995)とされているが、合理化の言い訳条件あり・なしにおいて結果に差が見られなかった。この結果は、言い訳条件が付加されても規範意識に緩みが生じないということと、融通が利かないという2つの意味があると考えられる。聴覚障害生徒は、適応性に欠ける(南出, 1991)性格特性があると述べられており、その影響もあるのではないかと考える。また、言い訳条件付加での規範意識においても、学年の上昇に伴って規範意識が低下する傾向は見られなかった。

6 規範意識の内面化

法律に触れるような重大な違反と考えられる「万引きをする」「タバコを吸う」「お酒を飲む」では、「法律やきまりを破ることになるので悪い」という、法律による規範の内面化がされていた。

慣習的に守られている行為や校則違反に該当する行為と考えられる「夜遅くまで遊ぶ」「悪口を言う」「遅刻をする」では、「先生に悪いと言われたことがあるから悪い」や「それをするとな怒られたり、罰があるから悪い」といった、先生や罰による規範の内面化の割合が高くなっていた。聴覚障害生徒は、その行為が法律に触れるような重大な違反であるのか、慣習的に守られている行為であるのか、校則違反に該当する行為であるのかによって、規範の内面化が異なると考えられる。

7 対象群間の比較

きまりやマナーの知識(13項目)を除いた50項目について、性別とインテグレーションの経験の

有無により群を分け、2 群間で t 検定を行った。有意水準 5%以下で、性別では、50 項目中 17 項目、インテグレーション経験の有無では、50 項目中 6 項目に有意差が見られた。性別による比較では、有意差が見られた 17 項目は、すべて女子の方が規範意識が高いことを示す結果であった。先行研究において、臼井・橘川(2007)が、中学生の規範意識は女子よりも男子の方が規範意識の低下がおこりやすいと述べている点と一致していた。

インテグレーションの経験の有無では、インテグレーション経験のある生徒は、規範意識が高いが、きまりに対して受動的他律的な考えを持つという結果が示された。インテグレーション経験により聴者の世界とろう者の世界のどちらにも馴染みきれず、中途半端な第三の存在場所が誕生して、アイデンティティ形成に問題が生じるものがある(上農, 2003)ことや通常学校での授業が分からない経験、コミュニケーションがスムーズにできない経験が影響しているのではないかと考える。

8 規範意識を高めるための要因や行動

クロス集計の結果、以下の 4 点が示された。

- ・ 生徒の家族が学校や先生をほめる割合が高いと挨拶や家庭学習をする割合が高い。
- ・ 家族に挨拶をする生徒は、目上の人に礼儀正しくすること、親や先生の注意に従うこと、校則を守ることを大切に思っている割合が高い。
- ・ いじめをとめない生徒は、ゴミをポイ捨てしたり、友達の悪口を言う傾向がある。
- ・ ゴミを拾わない生徒は、学校に遅刻したり、ゴミをポイ捨てしたり、電車やバスで騒ぐ傾向がある。

結果から、学校と家庭が連携して良好な関係を築いていくことで生徒の規範意識を高められると考える。学校教育では、いじめの傍観者とならず、いじめを認めないという意識を持った生徒を育てることが重要だと示された。また、生徒の規範意識の実態を知る手掛かりの一つとして、教室に落ちているゴミをきちんと拾っているかどうかを把握することが有効であると示唆された。

V まとめ

先行研究から、聴覚障害生徒の規範意識が低い可能性が示唆されていた。しかし、今回の結果から、きまりやマナーを知識として身に付けており、一般生徒と比べても規範意識が低いとは言えないことがわかった。

聴覚障害生徒に見られる規範意識の主な特徴として、以下のことが言える。

- ・ 学年が上昇しても規範意識が下がらない。
- ・ 非行を許容する文化に肯定的である。
- ・ 言い訳条件が付加されても規範意識に緩みが生じない。
- ・ インテグレーション経験のある生徒は、規範意識が高いが、きまりに対して受動的他律的な考えを持つ。

また、高い規範意識につながる要因として、家族が学校や先生のことをほめる環境、家族に挨拶をする、いじめの傍観者にならない、教室のゴミを拾うが見出された。

文献

- 廣岡秀一・横矢祥代(2006)小学生・中学生・高校生の規範意識と関連する要因の分析. 三重大教育学部研究紀要, 57, 111-120.
- 南出好史(1991)ろう生徒の表情認知能力と性格特性. ろう教育科学, 33 (2) 29-36.
- 文部科学省(2009)特別支援学校小学部・中学部学習指導要領. 海文堂出版.
- 長崎県教育センター(2008)長崎県児童生徒の社会性・規範意識に関する調査研究報告.
- 中野善達・根本匡文(2006)聴覚障害教育の基本と実際. 田研出版株式会社.
- 中野善達・斉藤佐和(1996)聴覚障害児の教育. 福村出版.
- 総務庁青少年対策本部(1988)規範意識と非行の深化との関係についての研究調査.
- 総務庁青少年対策本部(1995)青少年の規範意識形成要因に関する調査研究. 31-33.
- 高野桂一(1989)青少年の規範意識の内面化過程に関する基礎的・総合的研究—法規範意識の発達を中心として—. 九州大学教育学部教育経営学研究室.
- 滝 充(2006)「異学年交流」「地域交流」こそ育成の要諦. CS 研レポート, 58.
- 栃木県総合教育センター(2011)栃木の子どもの規範意識調査(小・中・高)報告書. 栃木教育センター研究調査部.
- 上農正剛(2003)たったひとりのクレオール. ポット出版, 138-150.
- 臼井茉莉・橘川真彦(2007)中学生における規範意識とそれに影響を及ぼす要因. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 30, 165-173.